

# 1930年代に高田で発行された地理教育研究誌： 『郷土・地理研究』と『郷土研究』

志村 喬

上越教育大学・社会系教育講座

## I はじめに

上越市史編集委員として資料検索をしていた1990年代末、上越市立高田図書館で『郷土・地理研究』と題したA5版50ページ位の研究誌を3冊見つけた。高田地理研究会なる組織が1932（昭和7）年5月に創刊した地理教育・郷土教育に関する研究誌で、1933（昭和8）年5月発行の第3号までが一緒に束ねてあった。上越で生まれ、中学生の頃から同図書館を利用した身ではあったが、それまでは一度も目にすることがなかった雑誌である。瞬間的に非常に興味を持ったものの、当時は現代史担当者として資料整理・執筆におわれていたことから、その時は簡単なメモをとってそのままにせざるを得なかった。

その後、現代史が2002年に発刊されたこともあり、この気になる資料を調べてみた。その結果、続編である『郷土研究』も目にすることができたので、両誌の概要を紹介する。両資料とも上越市立高田図書館内の郷土資料として保存されており、閲覧は容易である。さらに、久保田がまとめた当地の社会科教育研究団体の系譜に関する論考（1984）では、両誌の編集者であった星野恭誌の聞き取りをもとに当時の実態が報告されており非常に貴重である。しかしながら、両誌の存在は筆者の年代以下の現場教師にはほとんど知られておらず、本格的な研究もみられない。

そこで、本稿は1930年代に高田師範附属小学校を中心に発行された『郷土・地理研究』と『郷土研究』の概要を紹介することに加え、両誌をもとにした研究の可能性についても考察したい。

## II 『郷土・地理研究』の概要

『郷土・地理研究』は、創刊号から第3号までが高田図書館で確認されその目次は、第1表の通りである。このうち、各号末の何ページかは失われており、会則や奥付が不明である。しかし、各号の表紙に「高田地理研究会」との記載があるため、発行組織が同会であることは判明する。さらに、第3巻別巻部分は奥付が残っており、そこには次のような記載がある。

編集者 星野恭誌 高田師範学校附属小学校内

印刷者 田中彌助 長野市岡田町一七六 電話一七一

印刷所 大日本法令出版株式会社 長野市岡田町一七六 電話八〇・一六七八

ここからは、この組織の中心が高田師範附属小学校の星野恭誌であること、印刷は県外である長野市で行われていたことが分かる。さらに、創刊号所収の論文をみると、教師を中心とした地理教育・郷土教育に関する研究会誌であることが理解される。

創刊号巻頭には、東京文理大講師の武見芳二及び千葉県立長狭中学校教諭の尾崎帛四郎

# 第1表：『郷土・地理研究』の内容構成

創刊号（昭和7年5月）	
口絵 写真 高田市の景観	
新潟県産業分布図・・・繭・木炭	
高田地理研究会の結成を祝して	武見芳二（東京文理大講師）
千葉県立長狭中学校地理教室に於て	尾崎庸四郎（千葉県立長狭中学校教諭）
郷土本然の姿と地理	宮瀬睦夫
郷土・地理研究会設立に就いて	今村義孝
地理学に於ける語義，特性，地域の問題	渡邊義夫
城下町としての高田（上）	星野恭誌
高田駅とその駅前集落の機構	竹田 操
新潟県の地理区	斎藤憲明
小さな郷土研究（小千谷町付近）	小川哲夫
資料 郷土研究論文目録	研究会編
管下交通調査表	高土木派遣所調査
編集後記	
会則	
第2号（昭和7年12月）	
口絵 写真 親不知の險崖	
新潟県産業分布図・・・米（昭和6年），人口分布図	
乗合自動車交通量図	
白根郷の地理的瞥見（予報1）	竹田 操
郷土の交通に就いて－特に乗合自動車交通について－	小林潤治
日越村から	堀川達英
越後の国分尼寺について	小松芳春
地理的考察の方法	齋藤憲明
資料・郷土研究論文目録（2）	
編集後記	
会則	
第3号（昭和8年5月）	
本巻（不明）	
別巻 満州教材研究	

注：斜字部分は高田図書館所蔵本では失われおり詳細は不明である。

がそれぞれ発刊を祝す一文を寄せている。大潟町出身で戦後文部省図書監修官として社会科の「学習指導要領」編纂に携わり、後に東京学芸大学教授、日本社会科教育学会会長(1962-64)などを務めた尾崎帛四郎(1902-1991)の経歴は、中川浩一による紙碑(1992)に詳しいが、祝文を寄せた当時は千葉県の中学校教諭であった。祝文は「我が故郷に於いてこうした組織の誕生のあったことについて衷心欣喜するしだいであります。愚生も最近当地方に於きまして「安房地理学会」を結成しましたばかりですので、そのご苦心は十分察知できるのでありまして、竹田操先生始め同士諸君のご検討について謹んで深甚の敬意を表します。」からはじまり、自らは最近の二、三年極小地域の地理学研究を進めていることを述べながら「多くの時と力と機会を持たない吾等地方人としてはまことに苦しい立場にあるのですが、(後略)」と記している。ここからは、高田のみならず当時の地方における地理研究活動を支えた地理教師の姿が垣間見える。

構成面では、創刊号、第2号とも口絵に写真と分布図を、巻末に資料として郷土研究論文目録を共通して掲載している。写真は、高田市中心部と親不知の景観を空中から撮影したものである。この空中から撮影した写真(航空写真)に関して斎藤(1997,p.6)は、「三澤[勝衛]は『郷土地理の観方』(1931)で二葉の航空写真を使っている。しかし尾崎も『房総の地誌』(1929)で最初に航空写真を使っている。なお、航空写真の使用は1936年頃に一般化したのが、それを効果的に使ったのは尾崎(1933a[地誌研究の対象として見たる房州,大塚地理学論文集, 1, 33-48])が最初であろう」(〔 〕内は筆者挿入)と指摘している。これをふまえると、1932年発行の本誌に航空写真が掲載されていることには注目してよいであろう。

分布図は、新潟県全域における繭、木炭、米の生産量及び人口の分布をドットマップで丁寧に表現している。郷土研究論文目録の部分は残念ながら欠落しているが、略名を用いるとされているのが、地学雑誌、地質学雑誌、地理学評論、地理教育、地理教材研究、東洋学芸雑誌の6誌であることからすれば、地理学及び地理教育に関する研究が本誌では重視されていたことが理解される。

個別内容的には、新潟県内の詳細な地理・郷土研究をはじめ、当時の地理区論を背景にした創刊号所収「新潟県の地理区」論文や、時代状況を感じさせる第3巻「別巻 満州教材研究」など地理教育史的に興味深いものが掲載されている。

### Ⅲ 『郷土研究』の概要

高田図書館で確認できた『郷土研究』は1934年(昭和9年)1月発行の第2巻からである。したがって創刊号にあたる第1巻が不明であるが、これに関して第2巻1号末の会報に記載された「会名改正について」で、次のような記述がある。

誕生後一年いよいよ第二巻を出すことになった。(中略)所掲論文をみると多くは地理的な物で郷土史論文の二、三があるのみである。これは郷土・地理研究という名が自らその範囲を狭くした物かもしれない—広義の名前と思ったが—。

なるほど郷土と云う物は広がりを持ったつながりのある土地でそこには時間的に変化する歴史的半面と場所的に変化する地理的半面があり。又視角により、他科学からの観点も存在する。この意味から云うと総合的郷土研究誌とすれば抱擁性がある。

## 第2表：『郷土研究』の内容構成

第2巻 第1号 (昭和9年1月)	
英傑 謙信公	橋本文壽 (高田師範学校長・会長)
中魚下船渡村付近の段丘と住家の移動	澤喜徳 (北魚沼郡川口小学校)
頸城地方の地形的観察 (下)	齋藤憲明 (高田市南本町校)
越佐地理かるた	村山紀一郎 (高田師範学校)
百年前の直江津町を語る	片田恩一編 (高田新聞社)
郷土の地理の中から	堀川達英 (三島郡日越小学校)
彙報	
牛ヶ首地震	山本敏夫 (高田師範附属校)
弥彦及佐渡の植物数種	後藤光衛 (高田師範専攻科)
糸魚川の喧嘩祭	室川權三郎 (高田師範専攻科)
高田本町交通調査	星野恭誌 (高田師範附属)
会報 (会名改正について, 役員追加依頼)	全69ページ
第2巻 第2号 (昭和9年10月)	
口絵 写真 佐渡海岸段丘 説明	今村義孝
頸城郡に於ける南朝の人々と村山氏の研究	小松芳春
鉄道省信濃川発電所の概要を語る	田村亮 (中魚沼郡千手小学校)
高田を中心とした郷土史 (1)	池田嘉一 (高田市南本町尋常小学校)
新住宅地としての寺町 (高田市) の考察	杉原誠一郎
高田市南本町通りの地理学的研究	平原義信 (高田市南本町校)
会報・会則	全43ページ
第2巻 第3号 (昭和10年6月)	
口絵 写真 柏崎市街と番神岬	
大崎菜について	河村國芳 (南魚沼郡大崎小学校)
住宅地としての寺町区域の研究 (予報)	齋藤正治郎 (高田市大町小学校)
本能寺の変と越後の形勢 附 街道祭, 頸城郡の用水祭	小松芳春 (東頸牧村高尾小学校)
高田を中心とした郷土史 (2)	池田嘉一 (高田市南本町尋常小学校)
東洋一の水電郷中魚沼 (1)	柳澤喜徳 (北魚川口校)
郷土の偉人・郵便の父 前島密男爵 (1)	小林潤治 (中頸戸野目小学校)
郷土スタンプの旅	
会報・新入会員	全51ページ
第3巻 第1号 (昭和11年5月)	
口絵 写真 佐渡小木港	
新潟県下に於ける積雪の地域的研究	福井英一郎 (東京高等師範学校教授)
磐梯の旅	飯田正義 (北蒲笹岡小学校)
郷土の偉人・郵便の父 前島密男爵 (2)	小林潤治 (中頸戸野目小学校)
会報	全48ページ

注：斜字部分は高田図書館所蔵本では失われおり詳細は不明である。

り大衆性がある。又吾々の機関誌は相互研究家の発表機関として独占すべき物でなく郷土一般における啓蒙的部分をも担当したい。そこに郷土研究の重点があると思う。よって満一年の誕生にあたり別記記載の規則改正を断行した。（後略）

（幹事長 今村義孝）

ここからは、第1巻の誌名は『郷土・地理研究』であることが記されおり、『郷土研究』誌はその継続誌であることが分かる。実際、本号の奥付は、編集者が「高田師範学校附属小学校内 星野恭誌」であることをはじめ『郷土・地理研究』と全く同じである。

会名変更の理由は、大衆性・一般性・啓蒙性を目指すためであると理解されるが、そのような会の方針は、本会誌の内容に表れている。第2表は高田図書館で確認された『郷土研究』第3巻第1号までの内容構成であるが、第1表の変更前誌の内容と比較すると、歴史的内容を扱った論文が増えており、今村の云う郷土の「歴史的半面」の比重が高まっている。さらに「越佐地理かるた」「郷土スタンプの旅」「磐梯の旅」といった親しみやすい題目の論文もみられ、研究者だけではなく郷土の地理・歴史に関心を持つ一般の人々も読者として考慮しているように見受けられる。

#### IV 若干の考察

1932年から1936年にかけて発刊された『郷土・地理研究』及び『郷土研究』の概要を述べてきたが、この1930年代は社会科・地理教育史的には郷土教育が推進された時期であった。文部省は1930（昭和5）年全国の師範学校に研究施設費を交付し、翌1931年には師範学校の地理科教授要旨に「地方研究」を課し郷土教育の振興を図っている（関戸,2003）。したがって、高田師範附属小学校を中心とする両誌発刊の動きは、これら郷土教育運動と連動していたと推察される。例えば、『郷土教育』第3巻第1号末にある会則の概要は、次のようである。

##### 新潟県郷土研究会会則

- 一、本会は新潟県郷土研究会と称す。
- 一、本会は郷土研究に於ける同好の士を以て組織す。
- 一、本会は郷土研究を遂行し会員相互間にその資料を交換し、以て郷土教育の完成期す。
- 一、本会は趣旨達成のため左の事業を行う。
  - 1、会員の研究発表機関誌「郷土研究」を発刊す（年三回）。
  - 2、時に応じ講演・協議・座談・臨地研究・研究発表・研究授業・教鞭物作成等行う。
- 一、本会は左の役員を置く
  - 1、会長 2、副会長 3、顧問 4、賛助員 5、幹事及び地方幹事 6、委員
- 一、本会は必要に応じて地方に支部を設く。
- 一、本会の経費は会員の会費及び篤志家の寄付金を以てこれに充つ。
- 一、本会の事務所を高田師範学校附属小学校におく。

ここでは、本会の目的が「郷土教育の完成を期す」と明言されている。さらに『郷土研究』第2巻第1号末の役員追加依頼には、顧問として川合直次（高田市長）、森成麟造（本町2

丁目), 川室貫治(中頸諏訪村), 外山哲二郎(高田病院)が, 賛助員として松丘網雄(直江津高女校)と野澤康平(直江津小学校)が, 幹事として片田温一(高田新聞社), 市川信治(西城町三丁目), 山本敏夫(高田師範付属校), 片桐薫(同), 池田嘉一(高田市南本町校)が記されており, 構成員が教員だけではないことが分かる。上記顧問は, 会誌発行にあたり寄付を行ったことが同時に記されているが, この寄付実施者としては顧問横尾義智(東頸城行野)及び顧問田村寅吉(長岡市観光院町)が頻出する。横尾義智は, 小黒村(現安塚町)の大地主で豊唾村長として有名な人物である。また, 田村寅吉は長岡市の文具店「田村分店」の店主であり, 同店発行の「新潟県郷土地図」(星野恭誌編, 昭和9年1月発行)の広告が同誌には掲載されている。

本会の会員数は不明であるが, 会員の増加について第2巻第3号では約60名, 第3巻第1号では約50名を得たとそれぞれ会報部分に記されている。新入会員の分布をみると魚沼地方など頸城地方以外の者もみられる。

以上のような両誌の内容からは, 上越における戦前の社会科教育に関するいくつかの研究主題を設定することができる。地理教育に焦点を当てた場合, 先にあげた尾崎帛四郎をめぐる諸点が最初に研究主題に設定できるが, その他にも興味深い点がある。例えば, 久保田(1984)は, 戦前期に上越の社会科教育を指導した研究者をあげており, 地理教育分野では安田初雄の名前が見られる。渡辺四郎の紙碑(2004)によれば福島県生まれの安田初雄(1909-2004)は, 高田師範学校での教職を経て福島師範学校, 福島大学, 東北福祉大学で教鞭をとった地理学者であり, 高田師範で当時学んだ地理学者伊倉退蔵(横浜国大名誉教授)は3恩人の1人に安田をあげているという。さらに, 高田市街について景観地理学的に論じた安田の論文「高田市の景観」(地理学評論, 45-6, 1939年)や, 安田が自らを語った記録(正井・竹内, 1999)まで含めて考えると, 調査・研究対象となりうる課題の幅は拡大する。

尾崎の研究を考察した斎藤(1997, p.7)は「当時の中学教師の学問水準が北アルプスのように山脈をなしており, 三澤勝衛や尾崎帛四郎はそこから峰を出した槍穂のような頂きに相当するといえよう」と述べ, 糸魚川中学校教師時代に山崩れ研究を進めた中村慶三郎をそのような教師の一人としている。この中村慶三郎も, 年配者の教育実践者には周知のことかもしれないが, 次世代の実践者にはほとんど知られていない。するならば, 本稿で紹介した当地におけるこれら歴史的事実を批判的に検討しながら伝承すること, さらににはその他実践の発掘・収集・保存と検討の必要性は大きいはずである。

#### 文献

久保田好郎(1984): 同好組織の拡充。新潟県社会科教育研究会『郷土新潟県の生活風土』東京法令出版, pp.30-342.

斎藤功(1997): 尾崎帛四郎と南房総の地域研究。新地理, 44-4, pp.1-9.

関戸明子(2003): 戦時中の郷土教育をめぐる制度と実践—群馬県師範学校・女子師範学校の事例を中心に。「郷土」研究会編『郷土—表象と実践—』嵯峨野書院, pp.4-25.

中川浩一(1992): 尾崎帛四郎先生を悼む。新地理, 40-1, pp.1-2.

正井 泰夫・竹内 啓一編(1999): 安田初雄先生に聞く。『続・地理学を学ぶ』古今書院, pp.29-49.

渡辺四郎(2004): 名誉会員安田初雄先生の逝去を悼む。季刊地理学, 56-3, pp.219.